

た



国語問題

はじめに、これを読むこと。

(注意事項)

1. この問題用紙は二十三ページまでである。ただし、ページ番号のない白紙はページ数に含まない。
2. 解答用紙の所定の欄に、必ず氏名を記入すること。
3. 解答用紙には受験番号が印刷されているので、受験番号が正しいかどうか受験票と照合し確認すること。
4. 解答はすべて「解答用紙」の解答欄に記入またはマークすること。解答欄以外には何も記入しないこと。
5. 解答は、必ず鉛筆又はシャープペンシル(いずれもHB・黒)で記入すること。
6. 訂正は消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
7. 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。
8. 文字は楷書で正確に書くこと。
9. 解答用紙は持ちかえないこと。
10. この問題用紙は必ず持ちかえること。
11. 試験時間は六〇分である。

(マークの記入例)

良い例	悪い例
	

卷六 前集  
精詳錄心類



(一) 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

家族にとつてのいのちはたんなるいのちではない。いのちとは両親の形成する対幻想に裏打ちされた子どものことである。両親の間に、ということは親子の対幻想の中に産み落とされ(C・C・ハリスが『家族動態の理論』でいうところの出生家族)、やがて自らを主体とした男女の対幻想の世界を生き(C・C・ハリスのいう生殖家族)、最後に対幻想の外に去ってゆく(死という共同幻想に迎えられる)であろう存在のことである。

これを家族という世界をいのちがたどる基本像として提示しておきたい。このように基本像を置いてみると、いま私たちのいのちが、このような基本像をしまいまで生き終えるのがどれほど困難になっているかに思いたるであろう。

確認しておくべきは、いのちは、性を基底とした夫婦(男女)の対幻想の中にはなく、両親という言葉に表されているように、親子の対幻想の中に生存の場を得るのである。

こうした理解は、ひとまず私を落着かせてくれる。だが、心底落着かせてくれるわけではない。理由は、両親の間に生まれたいのちは、その後どうなるのであろうか、という問いがすでに待ちかまえているからである。

こういう問いを發してみるとすぐわかることの第一は、いのちとは、いのちの存続のことであるということだ。いのちは、その存続が保証されてはじめていのちなのである。この単純な真理は、次の、これも単純な真理へと私を導いてくれる。すなわち、いのちはその存続を支え、保証するいのちの直接の担い手を不可欠としているということである。

いのちの存続を支え、保証する直接の担い手をいのちの「受けとめ手」と呼ぼう。いのちは受けとめ手とともにあるとき存続でき、存続することによっていのちは家族にとつてのいのち、すなわち子どもという存在となる。この過程を「親子になる」というふうに表すことができる。

<sup>1</sup> 受けとめ手という言葉を用意したのは理由は、両親の間に生まれたいのちは、そのあとどうなるのであろうか、という問いを發したとき、受けとめ手という言葉はごく自然に呼び出された。生物的な親(産みの親)としての両親は、子どもという

のちの誕生とともに、受けとめ手としての両親へと移行するのである。「育ての親」という耳なれた用語をわざわざ「受けとめ手の親」にかえたのは、「育てる」の核心をなすのは「受けとめる」——「差しだし・受けとめる」——であり、「受けとめる」をもちいることで「育てる」の用語としてのあいまいさ、抽象性を排し、身体感覚のともなった実践的養育概念の獲得をめざそうとしたことによる。差しだすとは、受けとめるといふことの手前にある姿勢である。おっぱいを例にとろう。母親の気持ちの中で、おっぱいは自分のものであるけれど、子どものものでもあるというふうに考えられているとすれば、おっぱいは子どものまえに差しだされているといえる。赤ちゃんが泣けば、母親はなにを措いても飛んでいつて、自分の胸にだきあげる。おっぱいで受けとめるのである。一見、当然のようにみえるけれど、このような行動を母親がとれるのは、気持ちにおいて、いつでも、おっぱいつまりは自分を子どもに差しだしているからである。あるいは差しだそうとする気持ちがあるからである。

このことは私たちに以下のことを教えてくれている。

一つは、「生物的な親」と「受けとめ手としての親」は必ずしも一致しないということ。家族において、親は通常こうした二つの親を当然のように生きている。だが二つの親の姿はつねに一致するとはかぎらないのだ。たとえば産後に母親が深刻な病気をかかえる状態にあれば、子どもの傍に「いる」という受けとめ手であるための基本要素をみたくとも、みたくことはできない。治癒するまでの期間、受けとめ手としての親になることを待たなければならぬ。母親の産褥死ということも少なくなつたものの、皆無ではないだろう。そうなつたときは、母親は受けとめ手としての親になることは不可能である。

だが、私が受けとめ手としての親という観点を用意したのは、こうしたいわば不運にみまわれた子どもの境遇を記述するためではないのである。

主な狙いは、「子育てに困難をおぼえている親」、あるいは一見それと対応しているようにみえる「育てにくい子ども」という問題がどうして発生するのか、その理由を「生物的な親」から「受けとめ手としての親」への移行が未完了であることにもとめることができるかと思えるからである。どう子どもとかわつていいかわからない。自分の自由をうばうので子どもがじゃまだ。いうことをきかない、おもうようにならない、「いい子」にならないから子どもがかわいくない。はては遺棄や虐待といった暴力がふる

われる。これらどの事象も共通して、産みの親であっても、子どもの傍に「いる」ことができず、それゆえ子どもというのちの受けとめ手になれない場合に起きているのである。

二つ目として、「生物的な親」と「受けとめ手の親」という二つの相が移行関係としてあるということは、生物的な親子すなわち血縁の親子だけでは親子関係は完結しないということ。生物的な親子は「親子である」という親子関係の出発点にすぎず、そこから受けとめ／受けとめられを基本関係とする X のである。

子どもというのちにとって望ましいかたちの親子の対幻想は、生物的な親が、いのちの受けとめ手というモチーフに先導され、受けとめ手の親というあり方にその重点をシフトしてゆく過程に、あるいは生物的な親が受けとめ手の親というあり方を新しく獲得してゆく過程に生じてくるのである。この両方の親子の対幻想に抱擁されてあるとき、子どもというのちは安心して安定する。そうなってはじめて、約束されているはずの自らの成長・発達の過程を歩むべく全エネルギーをそこへと注ぎこむことが可能になるのである。

これをウイニコットは「子どもは誰かと一緒のとき、一人になれる」というふうに命題化したのである（『遊ぶことと現実』橋本雅雄訳、岩崎学術出版社、一九七九年）。いうまでもなく「誰か」とは誰でもいい誰かではなく特定の誰か、受けとめ手のことである。「一人になれる」は、受けとめ手としての親とのあいだに対幻想が成立したことを告げる言葉である。

いのちおよびいのちの表出の受けとめ手になるということがいのちにもたらす基本的な効果について触れておこう。

受けとめ手による受けとめられ体験をもらった子どもといういのちは、安心して安定的にいのちを存続できるという感覚を得る。これを「ある」の感覚と呼べば、この「ある」の感覚を永続的に保証されるという経験が、受けとめ手に対する絶対の信頼を内部に生み出してゆくのである。これを親子の対幻想の原初の現れとみることができ、これこそが親子の間の絆の中核部分を形成するのである。

もう少し説明を加えると、この場合の信頼は安心して依存できる、安心して寄りかけられる、安心して頼れるという受身の感情として言い表せるものである。そのような受けとめ手への信頼(reliable-reliability)を原基に、子どもは他者を主体的に信頼す

ること(trust)が可能になるのだ。

最初の信頼が受けとめ手による受けとめられ体験を基底に、受けとめ手との間に、いわば受動的に形成されるということは、子どもといういのち、子どもという存在が根本において受動性としてあることに理由がある。あの両親の間にはなくこの両親の間に生まれたということは偶然であり、それは両親との関係においては受身であることをものがたっているのだ。

生誕という出来事に何一つ主体的に関与できなかったということ、何一つ選んでいない、すべて強制的に書き込まれて生まれたきた存在であるということ——私はこのようなありかたを根源的受動性あるいはイノセンスと呼んできた。

た親子の間に生まれる対幻想の最初の形態である「安心できる」(reliable)という意味での信頼を形成するのが、最早期の養育行動(＝母性的行動)であると考えてきた。

子にとつてもつものぞましく、

**c**

受けとめ手への最短距離にいる人は誰か。要するにもつとも自然に近いかたちで

もって受けとめ手になれるのはだれか、という問いに対しては「両親の間に生まれた人」という子の定義が答えている。受けとめ手の第一候補は子どもの最短距離にいる両親であることは誰にでもわかることであろう。両親が受けとめ手になってくれることは、たんにエコノミカルであるつまり効率的でむだがないばかりでなく、子どもにとつても最良の事態であること、そのことも右の定義から容易に了解できるはずである。

さらに重要なことを子についての右の定義は伝えようとしている。両親が受けとめ手としてまっさきに受けとめる対象は、子どもといういのち一般ではなく、自分たちの間に生まれたいのちすなわち我が子であるということ。こうした養育対象の特定化、**Y** は決してたんなる家族エゴではなく、家族エゴであってもそれは自然が命じる家族エゴであるということ。いのちはこの両親という特定の存在によつて受けとめられて、はじめて「このいのち」という特定性として存続し得るのである。「このいのち」という特定性として存続している状態を、ウイニコットは**A** 「と呼んだ。いまここにこのいのちがこのいのちとして存続しているという感覚である。自我あるいは自己」という独自の表出体——**B** 「が形成されるのは、こうした存在感覚、すなわち」**C** 「の上においてである。これをウイニコットは、**D** 「は」**E** 「に先行しなけ

ればならないという命題で表したのだった。

そしてこのような過程に生じる親子の対幻想こそが、夫婦の対幻想とともに、家族が個人とも社会とも異なる独自の領域を形成するうえでの基本的な要素なのである。

さきほど次のように書いた。「生物的な親」と「受けとめ手としての親」は必ずしも一致しない、このことは、生物的な両親が必ずしも受けとめ手としての親になるわけではないし、なれるわけではないということを伝えているのである、と。

こうした不一致あるいは移行の未完了状態が生じるということは、たとえば、「母性」という概念を考える重要な手がかりを提供している。母性を子どもといういのちを受けとめようとする受けとめ手の姿勢の別表現であると考えらるなら、そのような母性は本能でも自然でもない、ということが明らかになる。なんらかの理由で子どもといういのちの受けとめ手になれない、子どもに母性的に接することができない状態におかれる親は希<sup>まれ</sup>ではなく、いるのである。

例として虐待問題をもちだしてみると、簡潔にいつて虐待は、分類上身体的であろうと心理的であろうとあるいは性的であろうとネグレクトであろうと、そうした形態上の違いをこえて、いのちの存続に直接関わる受けとめ手の欠如という共通項をもっているのである。虐待の四つのカテゴリーは、受けとめ手の欠如の現れ方を示しているにすぎないのだ。虐待は受けとめ手の欠如を本質としている。ゆえに、その存続が危機にみまわれているのちに、受けとめ手という母性的存在をどのように用意するかということ、このことこそが主要かつ緊急の課題となるのである。母性は、産みの親なら誰でも間に生まれた我が子をまえにしたとき、おのずと身内からわきでてくる感情ではないのである。そうした意味で、本能でも自然でもないことは確かである。

フランスのフェミニズム思想家E・バダンテールは母性を、近代国家が家族を統治するために用いたイデオロギーである、つまり神話にすぎないと述べた(エリザベート・バダンテール『母性という神話』筑摩書房、一九九一年)。

d

、養育という場所からは、こうした認識は興味深いけれども実情にほど遠く、受けいれることはできそうにない。子どもといういのちを受けとめようとする受けとめ手の姿勢というリアルな母性理解が可能なのであるから。ここに関与するのは本能でも自然でも神話でもなく、あえて言葉を与えるなら、「意志」であるということになるだろう。



子どもといういのちは、受けとめ手による「受けとめ」(これを母性と呼んでもいいだろう)そして受けとめ手に受けとめられたことで得られる「受けとめられ体験」(これを母性体験と呼んでもいいだろう)がなければ、存続することはできない。母性とは、生物的な親が死ぬことなく生きのびて、自分たちの間に生まれた「このいのち」の受けとめ手になることを引き受けようとする過程に生じる、いのちへの特異な感受性およびその感受性の高まりのことである。もちろん、受けとめ手は母親以外の誰であろうと、しかも性に関係なく、候補者として名のりをあげることができる。

e

、子どものまえに自己を差しだし、居続けようと意志するのであれば、その母性的姿勢を、子どもに自分の受けとめ手であるとみとめられるチャンスは誰にでもある。ただし、子どもは産みの母親が受けとめ手としての母親になることを切望しているということ、この点は繰り返し強調しておいてもいいだろう。

(芹沢俊介『家族という意志——よるべなき時代を生きる』による)

問1 空欄 a ~ e に入る語の組合せとして最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- |   |   |       |   |       |   |     |   |      |   |       |
|---|---|-------|---|-------|---|-----|---|------|---|-------|
| ① | a | そして   | b | したがって | c | だが  | d | かつ   | e | すなわち  |
| ② | a | したがって | b | だが    | c | そして | d | すなわち | e | かつ    |
| ③ | a | したがって | b | すなわち  | c | かつ  | d | だが   | e | そして   |
| ④ | a | すなわち  | b | したがって | c | そして | d | かつ   | e | だが    |
| ⑤ | a | すなわち  | b | そして   | c | かつ  | d | だが   | e | したがって |

問2 空欄A～Eに入る語の組合せとして最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- |   |   |    |   |    |   |    |   |    |   |    |
|---|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| ① | A | する | B | する | C | ある | D | する | E | ある |
| ② | A | する | B | ある | C | ある | D | する | E | ある |
| ③ | A | ある | B | する | C | ある | D | ある | E | する |
| ④ | A | ある | B | ある | C | する | D | する | E | ある |
| ⑤ | A | ある | B | する | C | する | D | ある | E | する |

問3 空欄Xに入る最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① 「親子になる」というプロセスがはじまる
- ② 「一人になれる」ための試練が待ちうける
- ③ 「育てにくい子ども」に対する暴力が発生する
- ④ 「母性」的存在の用意という難題が持ちあがる
- ⑤ 「両親の間に生まれた人」という定義が成立する

問4 空欄Yに入る最も適切な語を次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① 抽象性
- ② 蓋然性
- ③ 独善性
- ④ 排他性
- ⑤ 同一性

問5 傍線1「受けとめ手」という言葉を用意したのには理由がある」とあるが、なぜか。本文中の言葉を用いて三五字以内で述べよ。(句読点も字数に含む)

問6 傍線2「生物的な親」から「受けとめ手」としての親への移行が未完了である」とあるが、このような「移行が未完了」という事態が生じるということは、どのようなことを明らかにしているか。次の中から最も適切なものを一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① 母性とは本能でも自然でもなく、子どもといういのちを受けとめようとする、いわば意志的な姿勢であるということ。
- ② 現代の社会は、家族という世界をいのちがたどる基本像を貫徹するのがとても困難な時代となっているということ。
- ③ 産みの親であれば、ごく自然に、我が子に対して自分を差しだそうとする気持ちが出てくるものだということ。
- ④ 子どもの遺棄や虐待といった暴力は、子どもといういのちに愛情をもてない場合に、生じるものであるということ。
- ⑤ 最も適切な受けとめ手は、受けとめ手としての両親というよりも、最短距離に位置している両親であるということ。

問7 右の文章には、次の一文がある段落の末尾から脱落している。どこに入るのが最も適切か。入るべき箇所の直前の一〇字を抜き出せ。(句読点も字数に含む)

【脱落文】こうした内的な姿勢がなければ、子どもの欲求を適切に受けとめることはできない。

問 8 本文の内容と最も合致するものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

① いのちは「このいのち」という特定性として存続することを切望しているのだから、同じように特定性としてある産みの母親がそのまま、絶対に受けとめ手としての母親になる必要がある。

② 生物的な両親と受けとめ手としての両親の不一致は、確固たる規範を失ってしまった現代社会においては、子どもへの身体的あるいは心理的な虐待という深刻な事態を招来することがしばしばある。

③ 生物的な親との間に形成される対幻想よりも、受けとめ手としての親との間に形成される対幻想のほうが、子どもといういのちにとって、より有用で効率的な対幻想であるということができるといえる。

④ 親子の対幻想の中に生存の場を得た子どもといういのちは、いのちの存続を保証されたことによる安心感と受けとめ手に対する絶対的な信頼感を抱き、それは他者に対する信頼感をも形成することになる。

⑤ 生誕という出来事にまったく主体的に関与することができなかった子どもという存在は、それゆえ根本的に受動的な存在であるのだから、いのちの唯一の受けとめ手である両親は子どもに絶対的な安心感を与えなければならぬ。

(二) 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

人にもものを贈ることほど厳しい試練はない。品定め時間がたっぷりある場合でも、ふと思いついてその気になった場合でも、相手の趣味や習慣はもとより、住環境まで考慮したうえでまぢがいなく喜んでもらえる品を選ぶなんて、ほとんど無理な話である。定番と呼ばれるものの範囲内で、ごく儀礼的に済ませてしまいがちになるのは、致し方ないことなのだ。

以前、ある祝い事の当事者となったとき、総計三十鉢を超える高価な蘭を贈られ、深い感謝の念とはべつに、世のならわしがいかに人の想像力を蝕んでいるかというひとつの事例を見た気がして、ずいぶん苦しんだことがある。兎小屋に等しい西洋長屋住まいの身であると常々お伝えしていたにもかかわらず、あまり馴染みのない花々をこれだけ一度に贈られては、どこにどう飾り、どう世話したらいいのか途方に暮れるほかなかった。贈り主は、贈られる側が多対一として対処せざるをえないことに、思い到らなかつたのだろう。

自分が贈る側になればまた、選んでいるときの気持ちに一抹の卑しさが混じるような気がしてきて、これも耐えがたい。紹介や推薦を頼まれると、あたりさわりのないものでごまかしたと思われまいよう、つい見栄を張りたくなくて、自分の趣味嗜好のレベルを超えた言葉を選んでしまう。そうになると、もう相手を度外視した、贈る側の自己満足と虚栄心の問題になってくる。

相手が欲しがっているもの、必要としているものを正直に尋ねてそれを手に入ればいいのかというと、そういうわけでもない。アクセサリーでも家具でも電化製品でも洋服でも、色や銘柄まで細かく指定してもらって探しに行けば、さほど苦勞はいらないはずである。新しく所帯を持つ人たちにしばしばおこなわれるのもこの種の実用に徹したリストアップ式の調達だが、私が参加した折には、結局のところ資金提供をしたにすぎない気がして、どうもすつきりしなかつた。

そもそも、なにが欲しいのかを尋ねることじたい野暮なのであり、選ぶ能力の欠如を自慢しているに等しい。好みを聞いたうえで贈ったものが不評であれば、なおさら落ち込みも激しくなる。贈りものをする際に必要なのは、やはり、自分ではなく、他者に向けられた想像力なのだ。財力や知識や趣味のよさなど関係ない、ひとりの人間として生きるうえで基本的な想像力。

それが、贈った側と贈られた側の、美しい心の合一という奇跡を生む。

<sup>3</sup> 正岡子規の『墨汁一滴』に、「人に物を贈るとして実用的の物を贈るは賄賂に似て心よからぬ事あり。実用以外の物を贈りたるこそ贈りたる者は気安くして贈られたる者は興深けれ」という一節がある。そんな事例が本当にあるのか。子規の身近には、たしかにあった。

今年の年玉として鼠骨そこつのもたらせしは何々ぞ。三寸の地球儀、大黒のはがきさし、夷子えびすの絵はがき、千人児童の図、八幡太郎一代記の絵草紙など。いとめづらし。此を取り彼をひろげて暫くは見くらべ読みこころみなどするに贈りし人の趣味は自らこの取り合せの中にあらはれて興尽くる事を知らず。

この日の記述は、「X」と締めくくられているが、子規の弟子としてその死を看取り、資料や住居の保存に尽力した寒川鼠骨が病牀の師に贈った心づくしのお年玉が「実用以外の物」であることは正しいとして、贈るほうも「気安く」なるかどうかは先に触れたとおりに疑わしい。ただ通常の事例と異なり、このふたりのあいだには、厚い信頼関係とこまやかな愛情のやりとりがあった。

印象深いのは、地球儀だ。上記の一節は明治三十四年、つまり一九〇一年一月二十八日付。子規はすでに十六日付で、この地球儀を「二十世紀の年玉なりとて鼠骨の贈りくれたるなり」と記し、大切にしていた。ガラス張りの窓の向こうにしか外界を持たない男に、二十世紀がはじまった年の記念として宇宙を凝縮した眼球を与えるとは、なんと壮大な思いつきだろうか。粗忽者どころか、これは相手の興味関心を射貫いた贈る人のみごとなお手本であって、鼠骨にはまさしく無用の用をYに変換する資質と、他者に向かう心のベクトルがあったのである。言葉の真の意味でなにかを人に贈るためには、地球規模の想像力が必要だということなのかもしれない。

(堀江敏幸「地球規模の想像力」による)

問1 傍線1「相手の趣味や習慣はもとより、住環境まで考慮したうえで」とあるが、このように物事に注意深く考えをめぐらし判断することを意味する四字熟語として最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① 試行錯誤
- ② 取捨選択
- ③ 意味深長
- ④ 温故知新
- ⑤ 思慮分別

問2 傍線2「世のならわし」とは、ここではどのようなことか。最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① 相手の好みを押し量ること
- ② 相手からよく思われるようにすること
- ③ 儀礼的に無難に済ませること
- ④ 自分の趣味嗜好を表現すること
- ⑤ 相手の想像力を尊重すること

問3 傍線3「正岡子規」と同年生まれで、俳句などを通じて関係の深かった人物を次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① 森鷗外
- ② 夏目漱石
- ③ 芥川龍之介
- ④ 中島敦
- ⑤ 太宰治

問4 空欄Xに入る最も適切な俳句を次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① 年玉を並べて置くや枕もと
- ② 病牀に日毎餅食ふ彼岸かな
- ③ 元日の行燈をかしや枕もと
- ④ 門番に餅を賜ふや三ヶ日
- ⑤ 柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

問5 空欄Yに入る最も適切な二字の語を本文中から探し、そのまま抜き出せ。



問6 本文の内容と最も合致するものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

① 人にものを贈るときは相手の住環境を十分に理解し、さらに好みを聞いたうえで想像力をめぐらして実用的なものを選ぶことが肝要である。

② 人にものを贈るときに注意しなければならないのは実用的なものを贈る場合で、ともすれば相手に賄賂であるかのように受け止められる危険性を考慮に入れなければならない。

③ 人へ贈りものをするときは、相手の好みや欲しいものを尋ねるのは野暮なので、一抹の卑しさを抱えながらも世間体を優先し、結局は定番で儀礼的に済ませてしまうことが大切である。

④ 人にものを贈るときに重要なのは贈る側の自己満足や見栄ではなく、相手の興味関心を的確に把握し、おしみな想像力を他者に向けることである。

⑤ 病人へ贈りものをするときは、その人の興味関心はもちろんのこと、容態までも考慮に入れて、壮大に想像力がふくらむものを贈るのが興味深くて喜ばれる。

(三) 次の文章は『更級日記』の一節である。これを読んで、後の問に答えよ。

今は、昔のよしなし心もくやしかりけりとのみ思ひ知りはて、親の物へ率て参りなどせでやみにしも、もどかしく思ひ出でらるれば、今はひとへに豊かなる勢ひになりて、ふたばの人をも、思ふさまにかしづきおほしたて、わが身も三倉1の山につみ余るばかりにて、後の世までのことをも思はむと思ひはげみて、霜月の二十余日、石山2に参る。雪うち降りつつ、道のほどさへをかしきに、

X の関を見るにも、昔越えしも冬ぞかしと思ひ出でらるるに、そのほどしも、いとあらう吹いたり。

X の関のせき風ふく声はむかし聞きしにかはらざりけり

関寺のいかめしう造られたるを見るにも、そのをり荒造りの御顔ばかり見られしをり思ひ出でられて、年月の過ぎ2にけるもいとあはれなり。打出の浜のほどなど、見しにも変はらず。暮れかかるほどに詣3で着きて、齋屋4に下りて御堂に上るに、人声もせず、山風おそろしうおほえて、おこなひさしてうちまどろみたる夢に、「中堂より麝香5賜はりぬ。とくかしこへつげよ」といふ人あるに、うち Y たれば、夢なりけりと思ふに、よきことならむかしと思ひて、おこなひ明かす。またの日も、いみじく雪降りあれて、宮にかたらひきこゆる人の具したまへると、物語して心ほそさをなぐさむ。三日さぶらひてまかでぬ。

そのかへる年の十月二十五日、大嘗会6の御禊とののしるに、初瀬7の精進はじめて、その日京を出づるに、さるべき人々、「一代に一度の見物にて、田舎せかいの人だに見るものを、月日多かり、その日しも京をふり出でていかむも、いとものぐるほしく、ながれての物語ともなりぬべきことなり」など、はらからなる人はいひ腹立てど、児8どもの親なる人は、「いかにもいかにも心9にこそあらめ」とて、いふにしたがひて、出だしたつる心ばへもあはれなり。ともに行く人々も、いといみじく物ゆかしげなるは、いとほしけれど、「物見て何にかはせむ。かかるをりに詣でむ志を、さりともおほしなむ。かならず仏の御しるしを見む」と思ひ立ちて、その暁に京を出づるに、二条の大路をしも渡りて行くに、さきに御明かし持たせ、供の人々淨衣姿なるを、そこから、棧敷10どもにうつるとて、往きちがふ馬も車もかち人も、「あれはなぞ、あれはなぞ」と、やすからずいひおどろき、あさみ笑ひ、あざける者どももあり。良頼の兵衛督と申しし人の家の前を過ぐれば、それ棧敷へ渡りたまふなるべし。門広うおしあけ

て、人々立てるが、「あれは物詣人をめりな。月日しもこそ世に多かれ」と笑ふ中に、いかなる心ある人にか、「一時が目をこやして何にかはせむ。いみじくおぼし立ちて、仏の御徳かならず見たまふべき人にこそあめれ。よしなしかし。物見で、かうこそ思ひ立つべかりけれ」とまめやかにいふ人一人ぞある。

(注)

\*三倉の山につみ余る……ここでは「倉に山となるほどの財力を蓄える」くらいの意

\*石山……近江国にある石山寺

\*齋屋……参籠に際して齋戒沐浴するための施設

\*麝香……麝香鹿からとった香料

\*大嘗会……天皇が即位して最初に行う新嘗祭

\*御禊……大嘗会に先立って行われる禊みそぎ

\*初瀬……大和国にある長谷寺

問1 傍線1「もどかしく」とあるが、なぜそのように感じるのか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① 子供を物詣に連れていっていないことを、申し訳なく思っているから。
- ② 生活が豊かになったのに神仏をおろそかにしたことを、後悔しているから。
- ③ 以前は神仏をかえりみなかったことを、恐ろしいことだと考えているから。
- ④ 物詣に行こうと思いつつなかなか行動にうつせないことを、反省しているから。
- ⑤ 親が物詣に連れていってくれなかったことを、ひどいことだと思っているから。

問2 空欄Xに入る地名として最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① 逢坂
- ② 山城
- ③ 信楽
- ④ 枚方
- ⑤ 米原

問3 傍線2「に」の文法的説明として最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① 断定の助動詞「なり」の活用形
- ② 完了の助動詞「ぬ」の活用形
- ③ 格助詞
- ④ 副詞の一部
- ⑤ 形容動詞の活用語尾

問4 空欄Yに入れるべき語として、最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① さざめき
- ② あくがれ
- ③ さはり
- ④ しのび
- ⑤ おどろき

問5 傍線3「さるべき人々」とはどのような人か。その具体例を文中から五字以上十字以内(句読点を含む)で抜き出せ。

問6 傍線4「いかにもいかにも心にこそあらめ」の解釈として、最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① どうしても、いかにしても、あなたの心を変えられないのか
- ② どうであつても、いかにあつても、わたしの心にまかせてほしい
- ③ どのようにでも、いかようにでも、あなたの心のままにすればよい
- ④ どんなにも、いかに、わたしの心を忘れないでほしい
- ⑤ どんなときも、いかなるときも、あなたとわたしの心は同じである

問7 傍線5「いとほしけれど」の解釈として、最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① 「ともに行く人々」が「一代に一度の見物」を見たがっているのは気の毒であるが
- ② 「田舎せかいの人」が「一代に一度の見物」を過大に評価しているのは悔しいが
- ③ 「兎どもの親なる人」と「一代に一度の見物」を見られないのは残念であるが
- ④ 「ともに行く人々」が「出だしたつる心ばへ」を理解してくれるのはすばらしいが
- ⑤ 「兎どもの親なる人」が「出だしたつる心ばへ」で見送ってくれるのはありがたいが

問8 傍線6「よしなしかし」とあるが、その心情を説明するものとして最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① 大嘗会も物詣も等しく価値がないと達観している。
- ② 作者の行動の真意を理解しない周囲の人間に絶望している。
- ③ 大嘗会に比べれば物詣などどうでもいいことだと判断している。
- ④ 作者の行動は表層的なものだと冷笑的にみている。
- ⑤ 大嘗会に浮かれていた自分をかえりみて恥じている。

問9 『更級日記』の作者として最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号をマークせよ。

- ① 藤原道綱母
- ② 建礼門院右京大夫
- ③ 菅原孝標女
- ④ 阿仏尼
- ⑤ 後深草院弁内侍

(四) 次のA～Eの傍線のカタカナの漢字と同じ漢字を含むもの、またF～Iの傍線の漢字の読みとして最もふさわしいものをそれぞれの群から一つ選び、その番号をマークせよ。

A 友人の無病息サイを願う

- ① 彼には作家になるサイ能がある
- ② 彼の提案がサイ用される
- ③ 事件のサイ判が行われる
- ④ サイ時記を確認する
- ⑤ 部屋に火サイ報知器を取り付ける

B 祖父はケイ虔なクリスチャンだった

- ① 要人のケイ護をする
- ② 事件のケイ緯を説明する
- ③ 街のケイ観を守る
- ④ 目上の人を尊ケイする
- ⑤ 彼の意見はケイ聴に値する

C 恩師からの手紙をハイ読する

① 人道にハイ反する行為

② 偉人をハイ出する

③ 図書をハイ棄する

④ 反対者をハイ斥する

⑤ 神社に参ハイする

D 教科書をフン失する

① 彼の態度にフン慨する

② チームのフン起を促す

③ 国家の内フンを鎮める

④ フン末を溶かして緑茶にする

⑤ 広場のフン水前で待ち合わせる

E 文化のシン興を図る

① シン興の勢力に負ける

② 謹シン処分が下った

③ シン判の判定に従う

④ 隣国とシン交を結ぶ

⑤ 成績不シンで監督が辞任する



F 相手チームのプレーは狡猾だ

- ① こうかつ
- ② こんかつ
- ③ こうこう
- ④ こんかう
- ⑤ きょうこう

G 難破した船が曳航される

- ① ひきふね
- ② ひっこう
- ③ えっこう
- ④ せんこう
- ⑤ えいこう

H 期待と不安が相克する

- ① あいかつ
- ② そうこく
- ③ あいこく
- ④ しょうかつ
- ⑤ そうかつ

I  
友人に裏切られた彼は悪の権化けんわになってしまった

① げんか

② ごんげ

③ けんか

④ こんか

⑤ けんげ



